

---

# 遊戯王GX ~夢幻のデュエリスト翔~

レイシキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX ～夢幻のデュエリスト翔～

### 【Nコード】

N5939Z

### 【作者名】

レイシキ

### 【あらすじ】

ごくごく普通で、デュエルだけは負け知らずの中学2年生柳井翔。遊戯王GXの最終巻を読み終え自室のベッドで昼寝をすると、起きたところは知らない公園のベンチ。翔は戸惑うが、いきなり見ず知らずの人にデュエルを挑まれる。持ち前のデュエルの強さと引きのよさで勝ったものの、自分のいるところがわからない。そして翔は自分がGXの世界にいることに気づく。そこで翔は元いた世界に戻るべく、手がかりを探し始めた。

## プロローグ（前書き）

間違えて短編にしてしまったものを改良して連載にしました。まだ初心者で更新も不規則ですが、よろしくお願いします。

## プロローグ

「インフェルニティ・デス・ドラゴンで攻撃、これでお前のライフは0だ！」

翔 LP 8000

瓶田 LP 0

「ぐああ！・・・お前何者だ・・・」

「俺は・・・夢幻のデュエリストだ!!」

と一言残し、翔はその場を去った。

「成り行きでデュエルしちゃったけど・・・ここはどこだ？」

そんなことを考えていると、制服を着た翔と同じくらいの年代の学生が歩いているのを見た。

「あの制服、どこかで見たことあるような・・・まさか、デュエルアカデミアの制服か！」

でも待てよ・・・あんなに何人もコスプレしてるわけないよなー」

翔はそこで気づいた。

「俺、GXの世界に来ちゃったってことか？うーんうれしいような悲しいような・・・」



## プロローグ（後書き）

ドラゴンの名前でデッキがわかると思いますが、僕もこのデッキを使っています。これからもよろしくお願ひします。

## V Sデュエルアカデミア

「てがかりつつつてもどう探せばいいかわかんねーな」

まず、翔は情報収集のため街に出て行った。

街に出ると繁華街につながっていてひととき賑わっていた。

チンピラがいそうな雰囲気だったが、足を踏み入れた。

繁華街はレストランやショッピングモール、中には趣味の悪い店もあったが、そのなかにカードショップがあった。

「こんなところにカード屋か、ちょっとはいつてみつか」

中に入るとやはりカード屋、小学生くらいから大人まで幅広い年代のひとがいる」

翔はポケットに手を入れると、なんと2000円が出てきた。そういえばお小遣いもらったばかりだったな。おお、なんと運がいい、通貨

も元の世界と同じ円みたいだ。

「すいませーん、エキスパートエディション2を1パックください」

貴重な2000円のうちの300円を使ってしまった。開闢出たらすごいけど、などと高望みをしながらパックをあけると・・・

ノーマルカードの後ろから出てきたのは・・・連鎖除外。

「きたー！連鎖除外。サイドに積むか」

デッキケースを出してサイドデッキの王宮の鉄壁を抜いて連鎖除外を・・・

「あんまり見ない顔だね、君も遊戯王やるんだ」

いきなり声をかけられ翔は驚いた。

「驚かせちゃったならごめんね。僕、鈴木健吾っていうんだ。君の名前は？」

ふりむくと、そこにはデュエルアカデミアの制服を着た翔と同じくらしい年のいかにも友好的な男子が立っていた。

そりゃ驚くだろこの世界の人間じゃないんだから、と思いながら翔は

「俺は柳井翔だ、よろしく」

と返した。

「いきなりだけど、デュエルしない？」

ええっこのタイミングでかよ、と思いながらもまあデュエルならと前向きに考える。

「いいよ、やるっ」

デュエルアカデミアの実力も見てみたいというのもあり、申し出を受けることにした。

「じゃあ、はじめよう」

「デュエル!!」

「デュエルフィールド、展開！」

「先攻、僕のターン、ドロー！僕は切り込み隊長を召喚。切り込み隊長の効果を発動！僕は手札からゼンマイ・ハンター

を特殊召喚する。」

翔は悟った。自分は負けるんだと。翔の手札はモンスター4枚と大嵐だ。相手はいわゆるゼンマイハンデス。最低この中から3枚なくなるのだ。

「切り込み隊長とゼンマイハンターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！」

二体のモンスターが1つになりまばゆい光を放った。光の中から姿を現したのは巨大な戦艦。

「現れよ！発条母艦ゼンマイティー!!」

「ゼンマイティーの効果を発動。1ターンに1度オーバーレイユニ

ツトを1つ取り除き、デッキまたは手札からゼンマイを1体特殊召喚できる。僕は手札からゼンマイネズミを特殊召喚！」

手札にあったんかいつ、と思っているとネズミ型の人形が現れた。

「ゼンマイネズミの効果発動、表側攻撃表示で存在するこのカードを表側守備表示に変更することで墓地のゼンマイを1体表側守備表示で特殊召喚する。」

僕は墓地からゼンマイハンターを特殊召喚！」

復活してきた憎きモンスター現る。しかし現実からは逃げられない。

「ここでゼンマイハンターの効果発動、ゼンマイティを墓地に送り君の手札を1枚墓地へ遅らせてもらおう。」

選択されたのは……インフェルニティ・デーモン。

喜びに浸ろうとしたが、そんな余裕があるわけもなく、同じ手口で2枚目・3枚目と……

3枚目のハンデスが終わると相手フィールドには効果使用済みで3体目のゼンマイネズミとゼンマイハンター。

「僕は2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクスーツ召喚！」

今度は何が出るのかと思いつながら見ていると、大きな悪魔のような巨人が大きな音とともに現る。

「現れる、？30破滅のアシッドゴーレム！」

見た目も打点も高いデカ物が出てきてしまった。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド」

長かったターンが終わった。でも俺のターンも長いぞ。

そつ心の中で思いつつ、翔は自分ターンを開始する。

「いくぞ、俺のターン！」

先攻1ターン終了

翔 LP8000 手札2枚 フィールド なし

健吾 LP8000 手札2枚 フィールド アシッドゴーレム1  
体 伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー！」

確率は3%以下。ここで引けるか？恐る恐るドローカードを見ると  
・  
・

来たー！！このタイミングで神引き！神様ありがとう！

感傷に浸るのもこの辺でやめにして、翔は勝ちに行くことにした。

「俺は手札から大嵐を発動！お前のバツクを破壊させてもらおう」

健吾の伏せカードが割れる。伏せカードは「神の警告」。危ないところだった。1枚の伏せカードにも大嵐はうつべきだと身にしみて感じた。

おっと、デュエルを続けなければ。

「俺は手札からインフェルニティ・ガンを発動！！そしてインフェルニティ・ガンの効果を発動。手札のインフェルニティ・ビートルを墓地へ送る。」

もうここまでくれば勝ちパターン。さあ、ソリティアの始まりだ。

「これで俺の手札はゼロだ。ここで俺はインフェルニティ・ガンのもう1つの効果を発動。このカード墓地へ送り、墓地からインフェルニティ・デーモンと

インフェルニティ・ネクロマンサーを特殊召喚。そして、インフェルニティ・デーモンの効果を発動。デッキからインフェルニティ・ミラージユを……」

「さすがインフェルニティ、回るととめられないね。降参だよ。」

もうちょっと回してシンクロモンスターを大量に並べどや顔をしたかった翔だが勝ち目は目に見えているので、渋々勝ちを認めた。



「全然悪くないよ」

まったく歓迎の意しか見せないため、

「では失礼します」

「じゃあ、いこっか」

そんなこんなで翔は健吾宅に”Homestay”することになった。

早速家に行くと、健吾の部屋に入れてもらった。そしていきなり

「明日、デュエルアカデミア行く？」

と聞かれた。夢のような体験だ。マンガの中の憧れの場所に通えるのだ。

でも落ち着け、翔。デュエルアカデミアは曲がりなりにも学園だ。金がかかるんじゃないか？

すぐに浮かんだ疑問を健吾にぶつけようとする

「お金なら大丈夫。奨学金制度があるから。」

こいつ、人の心理が読めるのかと疑ってしまうほどのジャストタイミングだ。

「でも奨学金って、成績よくないとだめなんじゃないか？」

「そのことも大丈夫。だって僕も奨学金で通ってるから。さっきのデュエルで大丈夫だと確信したんだ。」

まあ、一応1つ疑問が晴れた。でもまだ聞きたいことがある。

「家族は？」

健吾は間を置いていった。

「親はいないよ。お姉ちゃんはいるけど・・・」

なんか聞いちゃいけないことを聞いてしまった気がして申し訳なくなつた。

「まあ、明日に備えて早く寝ようか」

翔は立場をわきまえない発言をしてしまったが、健吾はまったく気にしていない様子で

「そうだね、寝ようか」

そして2人は睡眠をとることにした。

その夜、翔は寝付けず1人で起きていた。隣では健吾が寝息を立てている。

寝付けけないのも仕方がない。なんせマンガの世界にいるわけなのだから。今日はいろいろなことがあった。

昼寝をして・・・起きたら知らない世界で・・・2人とデュエルして・・・  
そして今、そのうちの1人の家に泊めてもらってる。

考えてもわからないことだらけだ。今は寝よう。

翔は夢の中へ落ちていった。

## V S デュエルアカデミア（後書き）

僕の友達にも「ゼンマイハングレス」を使う人がいます。1回決められると反撃はほぼ不可能です。事実、大会でも結果を残しています。正直、僕はこのデッキが嫌いですがいいデッキだと思っています。

## よつごぞデュエルアカデミア

「ついたよ、ここがデュエルアカデミア」

二人が立つ目の前には、東京ドームが4個は入りそうな学園がそびえたっている。

「まあ入って入って」

健吾に連れられて入っていくと、ほかの生徒たちの視線が集まる。

まあ当然だろ、制服すら着ていない外部の人間が入ってきているのだから。

「おはよ、健ちゃん。あれ、隣の子誰？知り合い？」

「知り合いだよ。昨日デュエルして今は僕の家泊まってる」

「何がどうなって泊まることになったのかはわからないけど・・・まあいつか。私、川島有里。あなたは？」

「俺は柳井翔。よろしく」

「えっと、有里は僕と同じデュエルアカデミアの生徒で僕の幼馴染。有里、翔は昨日デュエルして友達になったんだ。」

身寄りがないって聞いて、よかつたら家に泊まる？っていつて・・・で昨日の夜、一緒にデュエルアカデミアに行こうって」

「ふーん、で、デュエルの結果は？」

「僕がサレンダーしたよ。だってデッキが回るとめられなかったんだもん」

「ってことは……翔、相当強いんだねデュエル。」

「いやそうでもなくって……あのデュエルでは引きがよかっただけ……」

翔があわてて弁解していることに気づいていないのか、有里は

「そうだ！翔もデュエルアカデミア入らない？私たちも奨学金だから翔も大丈夫だよ！」

そうだった。完全に忘れていた。この学園には奨学金があったのだ。

「でも大丈夫？俺なんか入れるの？」

「大丈夫よ。何せあの鈴木健吾と川島有里の推薦なんだから」

「あの」ってどういう意味だ？と考えていると

「僕たちこう見えてもデュエルアカデミアのなかでも成績トップを争う仲間もあるからね」

驚いた。この女がそんなに成績がいいとは。有里を眺めていると

「何？私がそんな頭よく見えないって？そうよ私はブスで頭も悪いですよーだ！」

別にそこまでいってないんだけどな。ああ、なんか悪いことしちゃったかな。

「なんか頭にきた！デュエルで決着よ！」

この世界はなんでもデュエルで決着つけるんだな。まあいつか、実力見れるし。

「気をつけて翔、ああ見えても有里は厄介だよ」

「ああっ、健吾！何耳打ちしてんのよ！ヒキョウウよヒキョウウ！！」

「ばれちゃった。じゃ、がんばってね」

「いくわよ、」

「デュエル！！」

「デュエルフィールド、展開！！」

「先攻、私のターン！」

先攻はいつもとられる。相手の様子を伺うことにした。まあ、それしかやることはない。

「私は手札から神秘の代行者アースを通常召喚。そしてアースの効果を発動。デッキから創造の代行者ヴィーナスをサーチするわ。」

私はカードを2枚伏せてターンエンド」

代行だってことはわかったが、普通の代行かTG代行なのかわからない。TG代行は環境トップクラスのデッキだ。

それを使いこなしてるとなると健吾の言うとおり厄介だ。

「行くぞ、俺のターン！」

「ドロー！」

何でこういうときにモンスターを引かない。まあしょうがない。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド」

翔 LP8000 手札3枚 フィールド 伏せモンスター1  
体 伏せカード2枚

有里 LP8000 手札3枚 フィールド アース 伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！」

「トランプカード発動、ダストシユート！」

有里の手札を確認させてもらうと、T G - ストライカー・T G - ウルフ・朱光の宣告者・ヴィーナスだった。

迷いなくヴィーナスを選ぶ。

「ヴィーナス戻されちゃったし。あーあ、どうしょ

少し考えて有里は

「私は手札からT G - ウルフを通常召喚。そして私はレベル2のアースとレベル3のワーウルフをチューニング！」

シンクロ召喚、現れるA・O・Jカタストル！」

自分的には嫌いなモンスター現る。

「トランプ発動、神の警告」

「やらせないわよ、チェーン発動、神の宣告」

止められたー！ー！ー！これはちときつい。

「バトル！カタストルで裏側モンスターを攻撃！」

俺がセットしたモンスターは………カラクリ小町式四。

「あんだカラクリ使ってるのー！ー！ー！」

健吾も驚いた様子。まあ、無理もない。昨日のデュエルで使ったデ  
ッキはインフェルニティだったのだから。

でも、不利な状況には変わらない。

「私はこれでターンエンド」

ここであれを引ければまだ持ち直せる。

「俺のターン、ドロー！」

まずまずだ。

「俺は手札からカラクリ忍者九巻九を通常召喚。」

バトル、九巻九でカタストルを攻撃」

「自爆しに来たの？」

あたりが騒然となった。デュエルをしている間に人だかりができて  
いたのだ。

「もちろん自爆なんかしないさ。手札から速攻魔法発動、月の書！」

裏側になればカタストルの効果は発動しない。

カタストル、撃破。

「ここで九巻九の効果を発動。墓地から貳貳四を特殊召喚！」

これで展開ができる。

「メインフェイズ2、レベル3の式四とレベル4の九壱九をチューニング。」

シンクロ召喚！出でよカラクリ將軍無零！」

「無零はシンクロ召喚に成功したときデッキからカラクリを1体特殊召喚できる。来い、

カラクリ参謀式四八。このカードは特殊召喚されたときモンスター1体の表示形式を変更する。効果で式四八を守備表示にする。」

まだ終わらない。

「手札から簡易融合を発動。エクストラデッキからメカザウルスを特殊召喚。俺はレベル3の式四八とレベル5のメカザウルス

をチューニング。シンクロ召喚、カラクリ大將軍無零怒！」

「無零怒の効果を発動デッキからカラクリ……………」

「おつおつ、朝っぱらからデュエルかガキ共」

「あつ、木崎先生！」

「お前有里じゃなーか。で、お前の相手は誰だ？」

「えっと、この子は柳井翔って言って私と健吾の知り合いです。でもまだこのアカデミアには通ってなくて推薦しようと

思ってたところだったんです」

「ふーん、そういうことか。まあ俺も少しデュエルを見てたんだが、有里と対等にやりあってるどころか押してたもんな。」

「実力は確かだ。ま、俺から上に推薦してやってもいいぜ」

「本当ですか！？お願いします。」

「健吾が強く言ってくれていた。」

「でも、もうすぐ始業だぞ。野次馬も早く自分のクラスに行け」

「人だかりがあせったように消えていった。」

「残ったのは翔と健吾と有里。」

「お前らも早く行け。遅れたら宿題もれなく2倍だぞ」

「ひえー」

「有里はダッシュして行った。」

「こいつは俺がちょっと話しすつからよ」

「はい。よろしくお願いします」

「健吾も足早に自分のクラスに急いだ。」

「面接試験すつから俺について来い」

「あの、俺みたいなんだがよくわからない人間を入れちゃっていいんですか？」

「全然歓迎。ほら行くぞ」

こうして俺はデュエルアカデミアの面接試験を受けることになった。

## よつごぞデュエルアカデミア（後書き）

やっぱりTG代行は強いです。まあ今回は事故ってしまっただけでカラクリが先に動いたというわけです。数々の大会・CSで結果を残しているのがユーザーも多いのが特徴です。まだまだこれからいろいろなデッキを出していきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5939z/>

---

遊戯王GX ～夢幻のデュエリスト翔～

2011年12月23日01時49分発行